



週)報

2013~2014年度))) R I会長)ロン)D・バートン)
『ロータリーを实践して)みんなに豊かな人生を』
))))))))))第 2570 地区ガバナー)中)井)眞)一)郎)

国際ロータリー
第 2570 地区

狭山中央ロータリークラブ

〔例会場〕狭山東武サロン〒350-1305) 狭山市入間川 3-6-14)TEL)04-2954-2511
〔事務所〕〒350-1305)狭山市入間川 1 -24-48)TEL)04-2952-2277)FAX)04-2952-2366
<http://www1.s-cat.ne.jp/schuohrc/E> - mail:schuohrc@p1.s-cat.ne.jp
会長)栗原憲司) 会長エレクト)稲見)淳))副会長)高田虎光) 幹事)宮野ふさ子

【第 3 グループ内の例会日】 狭山(金)、新狭山(月)、入間(木)、入間南(火)、飯能(水)、日高(火)、狭山中央(火)
所沢(火)、新所沢(月)、所沢西(水)、所沢東(木)、所沢中央(月)

第 997 回(6 月 17 日)例会の記録

点 鐘 栗原憲司会長
合 唱 我らの生業
第 2 副 S A A 田中(八)君、若松君

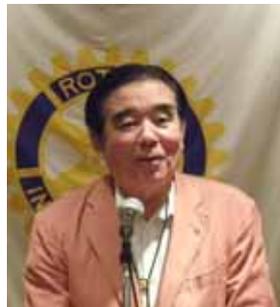
出席報告

会員数	出席者数	出席率	前回修正
35 名	32 名	84.38%	87.10%

パスト会長の時間

小幡直樹パスト会長

モンゴルへの訪問に同行させて頂きまして、大変ありがとうございました。1 月と 3 月にハワイに行ったのですが、6 月頃になるとまた海外へ行きたくになります。何故かといいますと、体と頭の静養にどうしても出かけたくなるからで、そんな時に海外へ行く機会を与えて頂きましたので、6 名の中に入れて頂きました。また私が会長の時のタミラ君に 2 年前に行ったときには会えなかったのが、非常に気になっておりました。タミラ君は狭山中央を終了しましてから、アメリカに語学留学をし、その後モンゴルへ戻りまして、ゴビ砂漠で銅を中心に掘っている会社に勤めたとのこと。2005 年位にできた新しい会社らしいのですが、3000 人いるということです。タミラ君はウランバートルの本社で、宝石を掘る機械の部品を調達する担当の部門にいたとのことでした。サラリーマンになってからすぐにオーストラリア、シンガポールに行き、最近戻ってきたとのこと。その会社とは欧米の資本で、カナダやイギリスが出資している会社だそうです。タミラ君に色々質問致しましたが、特に柴田さんが彼女がいるのか？と盛んに聞きましたところ、いるのではないかといった感じで、彼ももう 27 歳ですので、結婚した時には是非こちらのクラブに案内をして



くれれば、こちらからも何人も行くということをお話しておりました。彼はまだ、あと 2 年残っている契約社員だそうです。サラリーマンの他に、何か事業をやりたいといったこともおっしゃいました。車の中では、あちらは皆車が汚いので、車の洗車機をしたらどうかといった話も出て、非常に関心を示しておりました。やはり高級車、レクサス等もあるものですから、そういう会社が良いのではないかといったことを、沼崎さんと話していたようです。

当時、私はタミラ君と「大統領にでもなれよ」という話をしており、稲見さんが選挙資金を出すと言っていたので、行く前に稲見さんに選挙資金の確認をしてから、タミラ君にこの件はどうなっているのか聞いてみました。どうも大統領にはまだ心が動いていないようでしたが、国会議員には少々関心があったように思います。彼は米山奨学生でしたが、米山記念奨学生とは海外からこちらに来る人に対してお金を出す、そしてロータリー財団とは日本から海外に行く人に奨学金を出すということで、私も会長になるまでほとんど知りませんでした。少し勉強させて頂き、やっと米山記念奨学生のことを少々理解することができました。

よく質問されることは、なぜ裕福な人に奨学金が出て、貧しい人にでないのかといったことです。以前は 400 万円以下の収入の人に対して、救いの手を差し出すといった方針だったのですが、1999 年からは、いくら裕福でも知的で国際貢献ができるような人にお金を出すということになりました。今は指定校制だそうです。またもう一つ、いくら奨学金を与えても、最後はさようならで終わる不平不満が皆にあるということなのですが、国民性等で何か変化がありましたらお知らせしますということで、ロータリー財団で教育はしておりますが、なかなか国柄等で、手紙一つもくれないということが現状だそうです。

モンゴルには学友会というものがあります。学友会とは、奨学生が卒業してから国に帰り、同窓

会のようなものを作ることで、モンゴルにもそれができ、今年3月に第一回目の学友会を開いたそうです。モンゴルには300人の米山奨学生がいるそうですが、第一回目には30名位が集まり、50名位は連絡がとれそうだったということでした。学友会は、日本への留学等をお手伝いするような仕事をしているそうです。またロータリー財団にはホームカミングという制度があるそうで、例えば30周年記念等、そういった記念行事の時には、申請すれば25万円まで、ホームカミング制度によって招待することができるそうです。我々の30周年記念といいますと、私も80歳を過ぎており難しいと思いますので、25周年位で、タミラ君をホームカミング制度によって招待したらどうかと感じました。

幹事報告

宮野幹事

1. 中井ガバナーよりの次年度諮問委員会についてと、諮問委員辞退について
2. 次年度米山記念奨学部門セミナー開催について
3. 例会変更 飯能RC
4. 受贈会報 入間RC
5. 回覧物 ハイライトよねやま171
難民を助ける会AARニュース

委員会報告

R情報・雑誌)))))))))) 片山委員長)

5月のロータリーの友の勉強会の際に、5月号横書42頁の「行動しよう」ということで、クラブがなぜ縮小するのかわからない、5項目の質問について考えましょうというものがありました。ただいま寶積パスト会長から回答を頂いております。他の方も、事務局宛にFAXでも構いませんので送って頂き、まとめてみたいと思います。できるだけ私の期間中、6月一杯くらいで回答頂ければと思います。

今月の横書表紙は、愛知県鳥川の蛸が飛んでいる写真です。縦書表紙は、三重県「御田植祭」の写真です。詳しいことは縦書36頁に書かれています。私も何度か読みましたが、良いこと、参考になることが書かれていますので、目を通してみて下さい。

【横書】

30頁、「ありがとうロータリアン！第2のふるさとへの恩返し」ということで、マレーシア出身の女性が日本へ留学中に感じたことが書かれています。彼女が国にいる時には、日本は悪いことばかりした国だと教育されていたようですが、日本に来て初めて日本の良さがわかったということ

が詳しく書かれております。是非皆さん読んで頂きたいと思います。

【縦書】

9頁～群馬県富岡市について書かれています。富岡製糸場が世界遺産に登録されるということ、一度当ロータリークラブも見学に行ったことがあると思いますが、詳しく書かれていますので一読願います。

18頁、真ん中の段「ロコモとロータリー」は、医学博士が投稿しております。一番下の段、右から11行目に「一方で、最近野ロータリーの規約の改正にはいき過ぎた簡素化が目立ちます。誰でも会員になれて、ステータスもなくなったような気がします。また、大きいことは良いことだとばかりに世界的な大事業が計画、実施され、原点である職業奉仕の目的からは逸脱しているように思えます。」と書かれています。読んでみると、体の事を例えて文章にしてあるような気がしますので、皆さんもどう感じるか読んでみて下さい。

21頁、松浦会員の弟さんが当クラブで卓話されたときの「ワインの楽しみ方」が掲載されております。本当に良いことが書かれていますので、是非皆さん見逃さずに、必ず読んで頂きたいと思います。

「会員卓話」・・・・・・・・・・ 『モンゴル視察報告』

栗原成実会員

13日から行ってまいりました3泊4日の件に関しましては、7月に柴田さんから卓話をして頂けるため、私は「農業指導員」と自分で肩書きをとり、4月に8日間ほど一人でモンゴルに行ってきた話をさせていただきます。

日本から通訳がついていきましたが、モンゴル語とは非常に発音が難しく、覚えることが難しいものですから、通訳がいなければ孤独になってしまいます。今回の旅行もそうでした。

モンゴルでも少し特殊な場所です。日本からウランバートルに入り、ウランバートルから飛行機で約1時間のチョイバルサンという所まで行き、車で8時間、ノモンハンという場所まで草原を走りました。ほとんど中国との国境です。

チョイバルサンまでの飛行機はターボプロップの、カナダ製のボンバルディアという会社で作って



いる、滑走路が短くてもどこにでも便利に飛べるような飛行機でした。

一応農業技術ということで、どのように肥えているかということ調べるために、土の中を掘って状況を見たところ。上に草が



生え、下が土です。菜種を植え収穫した後ですが、根張りと言いますが、30cm 以上の方まで根っこが張っていましたので、非常に肥えた土地でした。1m 掘ってもこのような状況が続いております。



夏は 40~50cm 草丈、地平線があり、草原が延々とつづいています。

秋の写真を頂いてきたのですが、このアザミの種をコンバインで収穫し、中国に輸出しています。春 5 月に蒔いて 9 月に収穫ということで、2m くらいまで成長します。アザミそのものも強いですし、土地が肥えている証拠だろうと思っております。アザミは肝臓の薬になるそうで、種をこっそり持ち帰っておりますので、来年の春は蒔いてみようかと思っております。

種を蒔く機械ですが、アメリカの機械ということでした。トラクターで引っ張り、斜めにあるアームを横にし、そこから空気の圧力をかけて蒔き散らすということです。とにかく手をかけずに大規模で行います。



トラクターは、タイヤの高さが 2m 位ありまして、タイヤが前輪も後輪もダブルタイヤです。その後ろに畑をうなうローターがついています。この大型の機械が 5 台ありますが、そのうちの 2 台は GPS で管理され動いているそうです。セットして燃料を満タンにし動かしますと、片側 20km 行き、また 20km 戻ってくるという先進的な機械です。

先ほどよりも少し小型の機械ですが、同じようにトラクターに引っ張られ、第 1 段、第 2 段、第 3 段と、刃が違う、畑を耕す爪が 3 段階に分かれてついていて、1 回行っただけで畑が十分に耕すことができるトラクターです。このトラクターについている後ろの部分はもちろん取り外しがききまして、目的に合わせて部品を交換することで、多目的に使用することができます。



この黒い部分は私が写真を撮っている影なのですが、ここから地平線の彼方まで耕してあります。

こちらは 4 月の状況でして、話に聞きますと、片側 20km、そして私の後ろ側がまた 20km と計 40km ありますので、ここから直線で東京都心まで農地が続いているという、少し信じられないような状況でした。



こちらほとんど同じ場所ですが、草があるところはまだ使っていない農地で、左側の黒いところが耕作しているところです。この農場が菜種とアザミを植え始めて 3 年になりますが、一度として肥料をしたことがなく、しかし収穫量も落ちていないということを聞きました。

水色の建物、先ほどサイロがあった場所です。



ここが真ん中にありまして、南北東西片側 20km ずつの農地があります。ここで収穫できる菜種は、年間 5 万トンだそうです。この

ような農場で、教えて頂いたわけではないのですが、投資額は機械やハウス等を入れると、大体私が見積って最低でも 30 億円くらいだと思います。そしてその投資家は、地元の知事、共産党政権の時にこの場所の利権を取った役人と、韓国資本が入っているそうです。このまま放っておくといたところに韓国が進出するであろうという予測が立っています。生産したものは、チョイバルサンまで持ってきまして、そこから鉄道がチョイバルサンまで入っておりますので、貨物で中国の方に輸出しているとのこと。

アルタイという農場ですが、その農場からの帰り、自分の住まいであるノモンハンの町を丘の上から見下ろすと、集落がいくつかあり、ハル八川が流れております。この集落はハル八川の水の恵みで成り立っています。そんなに乾燥している場所ではないのですが、冬場は



ほとんど雨が降らず、雪も対して積もらない、-30 の極寒の地です。しかしウランバートルが標高 1500m に対して、この地域は 1000m ですので、



ウランバートルほどは寒くなく、農耕に適している場所です。そしてそんなに遊牧民がいらないということで、菜種やアザミを蒔いても、野生動物に食害されることは少ないと聞いております。

宿泊した場所は、ノモンハンの町の中に、ソビ

宿泊した場所は、ノモンハンの町の中に、ソビ



エトの時代にモンゴルとソビエトで作った対日戦勝記念博物館です。ソ連が崩壊し、その後すぐにモンゴルが民主

主義に変更しましたら、民間から軍人から全てがロシアに戻ってしまい、この戦勝記念館も誰も訪れるものがおらず、村の人たちが中身を宿泊施設に変えたため、中には何も展示されておられません。暖房だけはついておりまして、地下に石炭がありましたので、その石炭で火を焚き、夜の冷えをしのいでおります。

ロシア語なのかモンゴル語なのかよくわかりませんが、左側にソ連軍、右側にモンゴル軍の兵士が出ておりまして、写真には写っておりませんが、左の方には当時のソビエトの戦車と大砲が並べてあります。

ノモンハンで日本人が8千何百人、戦禍で倒れまして、その遺族が民主化されたモンゴルを訪ねて、建てた記念碑がありました。黒い部分に小さく「銃声とどろきしこの戦場に平和の法音、永遠にひびけよ」という日本語が書かれておりました。モンゴルと日本、共同で建てられた慰霊碑です。



この事件の発端となったハルハ川という川は、水源ははるかロシアの方から流れており、モンゴルを経て、中国の黒龍江に注いでおります。雪解けの時期だったからかもしれませんが、水量豊かな川で、イトウという魚もいるとのこと、是非今度は釣竿をもってきてくださいと言われました。

この3日間、先ほどの博物館に泊まりお風呂に入れません。もちろんお風呂に入るという習慣もなく、トイレは外といった所なものですから、この日は比較的暖かかったもので、靴を脱いで、少し足を洗いました。この川は水源がそんなに遠くないので、少し冷たかったのですがとても綺麗な川でした。



また、ソ連とモンゴルの戦勝記念碑であり、高さは、30m はくだらないと思うのですが、左にロシア軍、右にモンゴル軍の兵士が型どられております。

ノモンハン事件のお話を少しさせて頂きますが、1993年、大東亜戦争が始まる6年位前の4月~8月に渡って、

日本と満州国、ロシア軍との争いが、国境を接してお互いに会いました。この時日本軍は満州国を作りました、領地拡大を求め、どんどんと東へ北へと戦力を延ばしていた時です。その時ロシアは、

満州国に対する危機感で、かなりの兵力をこの国境地帯に集めまして、4月と8月に大きな戦いが繰り広げられたそうです。航空機まで導入され、日本の総責任者は小笠原中将と言ひ、諸説あるそうですが、日本軍約8700人、ソ連兵約9600人の戦死者がでたということです。

第1次の開戦の時には日本軍が有利でしたが、8月の戦いでは、ソ連軍に一方的に押されてしまいました。ところがその後、ナチスが台頭してきまして、モスクワの方が危なくなり、急遽協定を結びました。これが「日ソ不可侵条約」だったわけです。そして両軍が撤退し、日本でいうノモンハン事件は一応収束したということです。一方モンゴルとロシアは、この事件のこと日本語で「ハルハ川の戦争」と呼んでいるそうです。

私が一番心配していたのは、農地として適しているかどうかは農地のPHと塩の吹き出しなのです。まだ塩が良いのですが、場所によっては苛性ソーダが流出している場所もありますので、そういった所には草さえ生えません。しかし心配した通り、一部にはこういった所もありました。



95%がモンゴル領、5%が中国領というボイル湖は、モンゴルと中国の国境にあり、大きさはだいたい琵琶湖の倍ほどあります。冬場は水深が浅いために3m位の氷が張り、私が訪ねた時も溶けはしておりましたが、全面結氷といったところでした。淡水のかなりの量の魚が取れるらしいのですが、5%という権利の中で、中国の人たちがほとんど取ってしまっているということです。中国が取ってしまっているというよりも、モンゴルの人たちは魚を食べるという習慣があまりないようで、そんな話を聞きました。



淡水に住んでいる貝、2枚貝だそうです。下の砂地は、混ざりものがなく、とても綺麗でした。この貝もモンゴルの人たちは食べず、中国の人が食べるそうです。

モンゴル領にある油田は、トンボが、私が数えただけで26基ありましたが、全てモンゴル領です。あと数kmで中国領ですので、中国にも必ずとれる場所があるはずですが、あえてとらず、今はモンゴルから全て吸い上げ、温存しているのだと思います。この写真を撮るときに車を止めておりましたら、



警備隊がジープでとんできました。私と通訳と運転手の3人で行きましたが、2人はモンゴルの油田証明書を持っておりましたが、私はパスポート



次の例会 第2副SAA 有山君 東君
7月1日(火) 12:30~13:30
クラブ協議会 就任あいさつ